

4 青の家

九州派前史に属することであるが、「青の家」の存在は、九州派前結成の一つの核の役目を果たしたのではないかと思われる。「青の家」は、福岡市天神の新天町裏にあった。手造りの木造アトリエである。もともと福岡市在住の若手の出品者である、黒木耀治、中川保孝、寺田健一郎、米倉徳氏等の手によって、二科展出品作品制作用のアトリエとして建てられたものである。それが如何なる理由によるものか、その経緯も分からないが、当時独立展に出品していた、木下新氏が独占してしまい、制作のみかベッドを持ち込んで起居する様になったのである。

1953,4年当時、筆者は西南学院大学在学中であった。或る夕、新天町裏の一軒の飯屋の前を通っていた所、寺田健一郎氏に飲み屋の中から呼び止められ、紹介されたのが木下新氏出会った。当時、木下氏は「青の家」に既に住み着いていたのではないかと思われる。それから、筆者は「青の家」へ度々訪ねるようになり、連日訪ねたこともあったと覚えている。

木下氏は、電灯料を滞納して送電停止となったりしたが、ローソクの光で制作を続けていたこともあった、その当時彼は、褐色を主調としたキュビズム風の作品を描いていた。1957年、九州派結成により、筆者は「青の家」に集っていた。二科の黒木、寺田、米倉の三氏及び独立の木下氏と合流し、行動を共にすることとなった。

「青の家」の建築に当たっては、隣接していた、安川洋裁学院安川トシ子院長の御尽力によると聞いている。この件について、安川院長の御令弟で彫刻家安川畝氏と院長御令息の安川正巳氏にお尋ねした所、「青の家」はもともと市有地であったのを、安川院長が市側と交渉の末、借りられたものである。

「青の家」は新天町裏通りにあった、大島酒屋と和智歯科医院の間の狭い路地を抜けた、大島酒屋の真裏に建てられていた。やがて、木下氏が住んでいた当時、大島酒屋が市から払い下げを受け、木下氏は退居を迫られ、多少のいきさつはあった様であるが、薬院出口の東野という家の離れに住むようになった。九州派初期、そこで会合を開いたこともあった。

「青の家」が何時建てられ、壊されたか、今の所はつきり分からない。

「青の家」の建てられた経緯については、現在、佐賀県嬉野町の医療法人財団友朋会理事長である、中川保孝氏がお詳しいと聞いているが、お話を聞く機会を得ない。中川氏は精神障害者の絵画療法を確立され、高い評価を得られていると聞いている。